「比較文学研究室」主催　月例会

《翻訳と翻案をめぐって》

2015年7月29日(水)
戸山キャンパス39号館5階　第5会議室

7月29日（水)、午後2時45分から戸山キャンパス39号館5階第5会議室にて、総合人文科学研究センター早稲田大学「比較文学研究室」主催の月例会《翻訳と翻案をめぐって》が開催された。

本月例会は、比較文学研究室の研究員や関係者の研究成果の発信と研究者間の交流を目的に開催され、今回は堀内正規教授（文学学術院）による「北村太郎の『ふしぎの国のアリス』翻訳」と柿谷浩一（総合人文科学研究センター招聘研究員）による「ドラマ化を／と《読む》―『アルジャーノンに花束を』原作と野島伸司版の比較分析―」についてそれぞれ発表が行われた。

堀内教授の発表では、最初に北村太郎の生涯に始まり、次に本題の『ふしぎの国のアリス』の原文と翻訳を他のいくつかの翻訳版と対比することで、北村版の独特なアリス像についての解釈と詳細な説明がなされた。また最後には、北村の代表的な詩を取り上げ、その独特な口語的文体が『ふしぎの国のアリス』だけではなく、詩の中にもみられることが検証された。

柿谷研究員の発表では、まず『アルジャーノンに花束を』の原作小説とテレビドラマの相違点について触れられ、その後、父子関係、《対等》という概念、〈知〉とは何か、〈愛〉とは何か、〈神〉とは何か、など多岐にわたる論点が展開された。

発表後は他の専門領域の研究者からの意見交換や議論が活発に行われ、有意義な会となった。

（報告：柳下惠美）